2025年『撰集抄』現代語訳

昔、御室戸の法印隆明といふ、やんごとなき智者、
昔、御室戸寺の　法印隆明という、　尊い高僧が、

もろこしに渡り給はんとて、西の国におもむきて、
「中国に　渡ろう」と思いなさって、　西の国に　向かい、

播磨の明石といふ所になん住みていまそかりける
播磨の明石　という所に　滞在していらしゃる時に、

に、ア あさましくやつれたる僧の、来たりて物を乞ふ
驚き呆れるほど　みずぼらしい格好をした僧で、　やって来て　物乞いをする僧が

侍り。さながら赤裸にて、ゑのこを脇に抱き侍り。
おります。　まったく　裸同然の姿で、　子犬を　脇に抱えています。

人、後先に立ちて、笑ひなぶりける。あやしの者やと
周りの人々は、前後に立って、　笑ったり冷やかしたりした。　(隆明は)「不審な者か」と

思して見給へば、清水寺の宝日上人にていまそかり
お思いになってご覧になると、　(なんと)清水寺の　宝日上人で　いらっしゃったのだ。

ける。イ ひが目にやとよく見給へど、さながらまがふ
「見間違いであるのだろうか」とよく(目を凝らして)ご覧になるけれども、まさしく間違う

べくもあらざりければ、ウ かきくらさるる心地して、
はずもなく(宝日上人)その人だったので、　(隆明は)自然と悲しみに心が暗くなる感じがして、

伏しまろびて、「あれはめづらかなるわざかな」と
(その場に)倒れ伏して、　「これは　滅多にない　事態であることよ」と

のたまはせければ、上人ほほゑみて、「まことに物に
仰ったところ、　上人は笑って、　「本当に

狂ひ侍るなり」とて、走り出で給ふめるを、人あまた
気が狂っておるのです」　と仰って、　走り出ていらっしゃるように　見えるのを、　大勢の人を(隆明が)

して、取りとどめ奉らんとし侍りけれども、
使って、　引き留め　申し上げようとしますけれども、

オンライン 東大合格 敬天塾

さばかり木暗き繁みが中に入り給ひぬれば、
（上人は）木々がとても生い茂る中に　お入りになってしったので、

エ力なくやみ侍りけり。
仕方がなく、（追いかけるのは）中止になりました。

隆明法印は、あまりすべき方なく悲しく覚え給ひて、その事となく、その里にとまり居給ひて、広く尋ねいまそかりけれども、その後はまたも見えずなり給ひにき。さて里の者にくはしく事の有様を問ひ給へりければ、「いづくの者とも人に知られで、この村に住みても二十日ばかりなり」とぞ答へ侍りける。オこの事、限りなくあはれに覚え侍り。

隆明法印は、　甚だしく　どうしようもなく　悲しく感じなさって、
（他に）これという理由や目的もなく、その里に　留まりなさって、　（上人の行方を）広く
捜し求めますけれども、　その後は　二度と（上人は）見られ
なさらなかった。　そこで（隆明）は里の者に　詳しく　事情を
尋ねなさったところ、　「どこの者とも　人々に知られないで、
この村に　住み始めて　二十日　ほどです」　という回答でございました。
この出来事は、　この上なく　しみじみと心動かされる気がします。

何と、げに世を捨つといふめれど、身のあるほどは、着物をば捨てずこそ侍るに、あはれにもかしこくも覚え侍るかな。
なんとまあ、確かに（出家は）「世を捨てる」と表現しますけれども、（そうはいってもやはり）生きているうちは、
（せめて）衣服は捨てないものでございますのに、（衣服まで捨てなさった上人は）しみじみと心動かされ、立派に
も思われますなあ。

およそ、この上人はよろづ物狂はしき様をなんし給へりけるなり。ある時は、清水の滝の下に寄りて、
おおかた、　この上人は、　様々な　正気を失ったような（常識から外れた）行動を
しなさっていたという。　ある時は、　清水の　滝の下に立ち寄って、

合子といふ物に水を受けて、隠れ所をなん洗ひ給ふ
合子〔＝ふた付きの容器〕という物に水を入れて、　陰部を　洗いなさる

こと、常の態なり。いみじく静かに思ひ澄まし給ふ
ことが、　日常的な行為であった。　（また、）非常に　静かに余念をまじえず心を澄ましなさる

時も侍るめり。一方ならずぞ見え給ひし。澄み渡る
時もあるようです。　並一通りの僧ではなく　見えなさいました。　澄み切った

心の内は、いつも同じさきらなれども、外の振る舞ひ
心の内側は、　常に　同じ才能と知恵を持っているけれども、　外見上のふるまいは、

は百に変はりけるは、カよしなき人の思ひを、我のみ
数多く（常識とは）変わっていたのは、　「取るに足らない（平凡な）人々からの（尊敬の）念を、自分一人

一方にはとどめじと思しけるにや。
にだけは受けないようにしよう　とお思いになったのだろうか。

この上人ぞかし、中関白の御忌に、法興院に籠り
この上人こそが、　藤原道隆の追善供養の日に、　法興院に籠って、

て、暁方に千鳥の鳴くを聞き給ひて、
夜明け前頃に　千鳥が　鳴く声を　聞きなさって、

キ明けぬなり賀茂の河原に千鳥鳴く
夜が明けたようだ。　賀茂の河原で　千鳥が鳴いている。

今日もはかなく暮れんとぞする
今日も（また）あっけなく　日が暮れようとしている

と詠みて、『拾遺集』に入り給へり。
と詠んで、　『拾遺和歌集』に　（その歌が）収録されなさった。

明けぬるよりはかなく暮れぬべき事の、かねて思は
夜が明けたらすぐに、　あっけなく　日が暮れてしまうにちがいないことが、以前から自然と悟って

れ給へりけるにこそ。かの『拾遺集』には円松法印
いらっしゃったのだろう。　あの　『拾遺集』　には　円松法印

と載りて侍るは、上人の事にこそ。
として載っておりますのは、　この上人のことである。